

《訳語類解》《同文類解》《蒙語類解》の 漢語見出し語の異同について — 司訳院類解辞書中の漢語について（その2）—

福 田 和 展

要旨：《訳語類解》《同文類解》《蒙語類解》は李朝時代に外交実務と通訳官養成のための外国语教育を管掌した司訳院から刊行された漢語、満州語、蒙古語辞典である。この三書はともに見出し語が漢語で立てられており、その漢語は16世紀末から17世紀前半の漢語北方方言が収録されている。本研究はこの三書の漢語について比較分析を行い、その特徴を明らかにすることによって、《訳語類解》《同文類解》《蒙語類解》の近世漢語研究資料としの価値を見出すものである。なお本稿はその続編として《訳語類解》《同文類解》《蒙語類解》三書間の漢語見出し語の異同や同義・類義関係にある語について考察を加え、これら三書に収録された漢語語彙の特徴を明らかにするものである。

0 はじめに

前号「《訳語類解》に注記された漢語の同義・類義語について—司訳院類解辞書中の漢語について（その1）—」（三重大学人文学部『人文論叢』第19号）では、司訳院刊行の漢一韓対訳辞書である《訳語類解》の漢語見出し語下に注記された漢語語彙と漢語音注音について取り上げ、該書中に見られる漢語見出し語に注記された語や注音が文白異読の違いや北方方言のより土語的な語彙や発音と同時に、また下江官話的な特徴をもつ語彙や発音も注記されていることを指摘した。その中で、「～巴刺」のように《訳語類解》では見出し語下に注記されている語が、《同文類解》《蒙語類解》では見出し語として立てられていることを指摘し、このことから満州語、蒙古語訳官養成のためのテキストである《同文類解》《蒙語類解》に収録された漢語語彙と漢語訳官養成のためのテキストである《訳語類解》のそれとでは対象とした漢語に何らかの「質」の違いがあり、その質の違いが三書間の収録語彙に反映されているのではないかということが予想されるに至った。本稿では以上の点に着目し、《訳語類解》《同文類解》《蒙語類解》^①に収録された漢語見出し語の異同について分析するのだが、今回は特に《訳語》に注記された同義語で《同文》《蒙語》に収録されている語と《同文》《蒙語》に収録され《訳語》に収録されていない語、また《同文》《蒙語》に多く見られる“～了”“～啊”“～着”的3点を中心に考察を加える。

1 《同文》と《蒙語》の関係

前稿にも記した通り、《訳語》と《同文》《蒙語》両書は先に成立した《訳語》をそのまま満州語やモンゴル語に置き換えたものではなく、《訳語》に収録された漢語語彙と《同文》

《蒙語》に収録された漢語見出し語や門項の分類には相違が認められる。《同文》の跋文にもある通り、《同文》は《名物》という恐らくは清学で使われた満州語の語彙集を《大清全書》《清文鑑》《同文廣彙》等の書を参考して校訂し編纂されたのであるが、《同文》の底本となつた《名物》は現存しないために、《同文》の漢語見出し語にどの程度《名物》の収録語彙が反映されているのか確認する術がない。《大清全書》は満州文字字母順に語彙が配列された満－漢辞典で、《清文鑑》は1708年に門項毎に収録語彙を分類して掲載した満－満辞典の《御製清文鑑》刊行以来、満－蒙－漢、満－漢など多数の種類が刊行された一連の《清文鑑》の中でも、《同文》の刊行年（1748）から勘案して満－満辞典の《御製清文鑑》かあるいは、1735年に董圭が漢語によって解釈をした《音漢清文鑑》のいずれかを参照したものと思われる。《同文廣彙》について鄭光（1978）では「同文廣彙」は現在同一書各の辞書が伝わっていないが、「廣彙全書」という書名の辞書が同一なものと見られる。「廣彙全書」は大阪外国語大学付属図書館本を参照した」とし、《同文廣彙》が《廣彙全書》と同一であると指摘されている。

上掲鄭光1978ではこれらの《同文》編纂時に参照された書物の門項の分類を比較しているが、《同文》と一致してはいない。

《蒙語》についても前稿で示した通り、上掲鄭光1978では《通文館志》続集什物条の記載から、《蒙語》の初刊本が存在したと指摘されてる。この初刊本は現存していないため、このときの改訂がどの程度のものであったかは知ることはできない。また、《蒙語》の漢語見出し語が何に基づいたのかも知る術がない。現存の《蒙語》はソウル大学奎章閣所蔵本（木刻本）と東京外国語大学所蔵本（手抄本）のみであり、これは1790年に方孝彦が《蒙語老乞大》《捷解蒙語》とともに《蒙語》を改訂し、《蒙語類解補》と《語錄解》を巻末に付して刊行した版本である。この時の方孝彦による《蒙語》の改訂について金芳漢氏は《蒙語類解》影印本解題で《捷解蒙語》の「蒙学三書重刊序」の

昨年節使之回 購得蒙文鑑一帙 即乾隆新頒之音 而與清蒙學諸臣 折衷蒙語新旧音之合於時用者 傍以清書註釈 乃蒙語之大方也（昨年使節が帰国した際、蒙文鑑一帙を購入してきた。これは乾隆帝の新たに頒布した音で、清学、蒙学の諸臣に与えた。蒙語の新旧音を折衷し、時用に適したものは傍らに満州文字で註釈している。まさに蒙語の大方である。）

との記載から「蒙文鑑」という書物を基に改訂が行われ、《蒙語》のモンゴル語ハングル転写法が《御製満珠蒙古語漢文三合切音清文鑑》（1780年刊）と一致することから、「蒙文鑑」とは《御製満珠蒙古語漢文三合切音清文鑑》であると指摘されている。また《捷解蒙語》影印本（弘文閣1988）巻頭に付された金炳秀氏の解題によれば、《捷解蒙語》の「蒙学三書重刊序」に

老乞大及類解二書即隨其字音之差異者仍舊板而補刊之

との記載から、この時の改訂が蒙古語音についてのみ行われたと指摘している。

以上の記載から分るのはどれも改訂時に基づいた文献のみで、しかも改訂時における漢語部分の改訂が行われたのか、行われたとすればどの程度だったのかという点については知ることができない。

《同文》が編纂の際に参照した《大清全書》《同文廣彙》《清文鑑》は漢語見出し語や門項の分類において《同文》《蒙語》とも完全に一致せず、むしろ《同文》と《蒙語》は収録された漢語見出し語や門項の分類においてほぼ共通しているのである。このことから或いは《同文》の底本となつた《名物》なる辞書の漢語見出し語に基づいて《同文》《蒙語》が編纂されたとも

考えられるのだが、《名物》は現存せず、《同文》の安命説の跋文にその名が記されるのみで、周辺資料の記載からその断片を窺い知ることもできない。なお、上掲鄭光 1978 では

門項の分類と表題語の選択、そして対訳の方法などにはほぼ完璧な一致が認められる《同文類解》と《蒙語類解》はほぼ同時代、同一人によって刊行されたものと思われる。

としている。

同一人物であったかどうかは考証の余地が無いのだが、少なくとも《蒙語》が《同文》に基づいて《同文》の満州語部分を蒙古語に置き換えるような形で編纂されたことはほぼ間違いないであろう。この点について上掲鄭光 1978 では、

当時の蒙古語は漢語や満州語に比べてその効用性が小さく、「蒙語老乞大」の安命説の序に‘蒙語其為急務 雖非漢清之比 其書苟謬則不可不釐正 則亦不可不印刷釐正也’とし、蒙語が漢語と清語（満州語）に比べさほど急務ではないが、本に訛謬があれば釐正せねばならず、またやはり釐正されたものは印刊しなければならないと言っているのは、蒙語に対する当時の必要程度を示している。

としている。《同文》《蒙語》の漢語見出し語を簡単に比較すると、《同文》にあって《蒙語》に無い見出し語が幾つか認められるが、このような語の殆どのは《蒙語類解補》に追加されている。例えば以下の 2-1 で取り上げる“盤退坐”のように《蒙語》では確認できないのであるが、《蒙語補》では“盤膝坐”的ように全く同一の漢語ではなく同義語が追加されている例や《同文》の漢語と全く同一のものが追加されている場合もある。この関係は《同文》と《訳語類解補》³⁾にも当てはまる。《同文》に収録されて《訳語》には収録されていない語の殆どが《訳語補》に追加して収録されているのである。この点については上掲鄭光 1978において既に指摘されているところである。

以上の点から、類解三書は刊行年からすれば《訳語》が最も早く、朝鮮朝の「事大交隣」の外交政策の中で最も重要視された漢学教科書の《訳語》の体裁の影響を受けて《同文》や《蒙語》が編纂されたと考えられがちであるが、しかし漢語見出し語についても満州語教育用に編纂された《同文》が、特に後の《訳語補》《蒙語補》の編纂に大きな影響を与えたことが分る。この点について上掲鄭光 1978 では《訳語補》《蒙語補》で追加収録された漢語見出し語の殆どが《同文廣彙》《清文鑑》《大清全書》に認められる点を指摘している。これは清代になって中国で刊行された満漢合璧様の満-漢、漢-満辞書が多数刊行されたことによって、より正確で豊富な白話語彙資料に朝鮮朝訳学が接することができるようになったからに他ならない。またこれらの満漢合璧資料は満州文字で漢語の白話音や蒙古語音を転写し、或いは満州語で漢語や蒙古語の解釈をしていたことから、当然清学を介して当時の中国における最新の言語研究の成果が漢学や蒙学に紹介されたと考えられる。

ところで、《同文》にはその後補編が刊行されていない。これは《同文》刊行の 24 年後の 1772 年に《御製增訂清文鑑》が刊行され、朝鮮朝で広く流布したことと、《御製増訂清文鑑》刊行の僅か 7 年後の 1779 年には《御製増訂清文鑑》の漢語見出し語の満州文字による漢語音注音をハングル転写に代え、朝鮮語訳を付し、満州語部分にハングルで満州語の発音を付した《漢清文鑑》を刊行したことと大いに関係がある。《御製増訂清文鑑》は多数の清文鑑の中でも最も権威あるものとされ、これを韓訳した時点で清学においてこれ以上の辞典編纂の必要が無くなったと判断されたためであると考えられる。なお、1779 年刊行の《漢清文鑑》の漢語音注音には漢学書籍で主に使用された崔世珍の《四声通解》に基づく漢字音ハングル転写法と

は異なった、《御製増訂清文鑑》に於ける満州文字による漢語音注音の影響を受けた、いわば清学独自の漢字音ハングル転写法が確立している。この点については別稿に譲りたい。

なお、前稿では《訳語補》《蒙語補》については考察の対象としなかったが、《訳語補》《蒙語補》に《同文》に収録された漢語見出し語が追加収録されていることから、本稿では必要に応じて《訳語補》《蒙語補》も含めて考察の対象とすることとする。

2 《訳語》の注記語が《同文》《蒙語》に見出し語として立てられている例

前稿でも記した通り、《訳語》には朝鮮語訳の下に圈点を配した後、「一云～」「一作～」「或云～」等として注記されている漢語語彙が165語認められるが、このうち《同文》《蒙語》で見出し語として立てられているもののうちの4例について考察する。

2-1 「～巴刺」について

前稿では「～巴刺」が北方方言の中でも特に東北、河北などの特定地域のより土語的なことばであるとした。ここでは《同文》《蒙語》での「～巴刺」を中心に考えてみたい。

《同文》では東、西、南、北、上、下、傍のそれぞれに「～巴刺」がついていることは既に前稿で指摘した。この中、“下巴刺”“上巴刺”“傍巴刺”には別に見出し語として“上頭”（《同文》地理門19-6）“下頭”（《同文》地理門19-7）“傍邊”（《同文》地理門20-6）と同義関係にあると思われる語が収録されている。これらの語の朝鮮語訳及び満州語は“上巴刺”が“우入股”「上のほう」“dele”「上、物の上」³⁾、“上頭”が“우히라”（우まで上の意味だが、1斗の部分が不明）、“ninggu”「上、上方」、“下巴刺”は“아ქ入股”「下の方」“wala”「下部、下方、低処」、“下頭”が“아ქ”「下」“fejile”「下、下方の」、“傍巴刺”が“곁”「そば、わき、傍ら」、“dalbaki”「傍らにあるもの、両側のもの」、“傍邊”が“マ”「へり、ひとり、きわ」、“dalba”「傍ら、側方、両わき」“一云 dalin”「河岸」となっている。朝鮮語訳からして“～巴刺”には「～の方」という含意があるようである。《蒙語》ではやはり地理門に東西南北それぞれの後に「～巴刺」がつくものと、“傍巴刺”が収録されている。“傍巴刺”的朝鮮語訳は「頃 [頃に同じ]」である。《蒙語》には“上巴刺”“下巴刺”が収録されていないが、《蒙語補》に補充されている。しかし、“～巴刺”的形では表われず、“上頭우入股”（《蒙語補》地理補212-7）と“下首아ქ入股”（《蒙語補》地理補212-8）の形で補充されている。“～巴刺”は清代に刊行された《清文鑑》にも認められることから、やはりその非官話的または土語的な性格のために削除されたものと考えられる。“下首”は「中国語大辞典」では白話語彙として「下」の意味としている。また「漢語方言大辞典」では西南官話とある。

2-2 盤退坐（《同文》動静門52-10）

穩坐○一云盤坐（《訳語》動静門81-5）

《蒙語類解》には“穩坐”も“盤腿坐”も収録されていないが、《蒙語補》に“盤膝坐”（動静補225-6）が見える。更に《訳語補》動静門303-7にも“盤腿坐”が認められる。《訳語》の見出し語“穩坐”は「どかっと座る」の意味で朝鮮語訳では“편히안싸”「ゆったりと、楽に座る」と解釈されている。現代漢語では“盤大坐”で「でんとあぐらをかいて座る」という意味があるので、類義の関係として《訳語》では“盤坐”を注記したと思われる。《同文》

《訳語補》の“盤退坐”と《蒙語補》の“盤膝坐”は同義の関係で、「中国語大辞典」では“盤膝坐”を書面語としている。

2-3 歪水（《同文》地理門 18-3）

舀水 歪水上全（《訳語》食餌門 98-7）

歪水（《蒙語》地理門 15-6）

朝鮮語訳はともに“읊쓰다”「水をすくう、汲む」である。この語は前稿でも取り上げたが、《訳語》では“舀水”的他にも“舀飯”“舀湯”的項にそれぞれ“歪～”と同義関係の語として収録されている。“歪”が“歲”と同音で、東北方言にその記録があることは前稿でも指摘した所である。《同文》《蒙語》では地理門に“歪水”が認められるだけである。《訳語》では注記または見出し語でも朝鮮語訳部分に“上全”と記された、つまり2次的な扱いを受けた“歪水”が《同文》《蒙語》で見出し語として立てられているのは、前稿の「～巴刺」同様、《同文》《蒙語》の対象とした漢語の方言性が原因であると考えられる。《訳語補》でも食餌補門 313-7 に“舀湯”が見出し語として立てられ、朝鮮語訳わきに“歪왜湯탕”が同義語として収録されている。《訳語》の収録語彙を補完する目的で 1775 年に刊行された《訳語補》でもなお“舀～”が見出し語として立てられ、“歪～”が同義語として注記に回されている点で、やはり《訳語》と他の類解二書の対象とした漢語の質の違いを伺わせる。

2-4 一虎口（《同文》算数門 172-6）

一坼○一云一虎口（《訳語》算数門 130-3）

朝鮮語訳は《訳語》が“호罟”「指尺 1 つ分の長さ」《同文》が“չ근罟”「小さい指尺」となっている。《蒙語》には“一穩”“一虎口”は収録されていないが、《蒙語》《同文》には“一扎”があって、朝鮮語訳には《同文》の一穩○一云一虎口と同じ“호罟”的訳が当っている。意味と“扎”的音からして“一搾”が当る。「中国語大辞典」では“一搾”“一楂”または“一搾搾”とし「親指と一指し指を開いたくらいの長さ」と解釈している。また、「漢語方言大辞典」では“一搾”をほぼ全ての官話地域に見られる語彙とし、“一扎”を中原官話としている。“一虎口”は前稿で考察した通り山東利津方言に記録されている。また、「漢語方言大辞典」では“一虎”を内蒙古臨河の晋方言としている。以上からして上記の 1 連の語はほぼ北方官話地域に分布する方言語彙であると考えられる。

3 《同文》《蒙語》に収録され《訳語》に収録されない語

3-1 寡是○尙[だけ]（《同文》雑語門 227-9）（《蒙語》雑語門 186-5）

“寡”は副詞で「～だけ」の意味である。《同文》《蒙語》にはこの“寡是”のみで、より標準的な“只是”などは収録されていない。また《訳語》《訳語補》には“寡是”“只是”的どちらも収録されていない。“寡”は現代方言では東北官話で使用される副詞⁵⁾である。また《清文鑑》にも収録されていないことからしても、当時の方言的色彩の強い語であることがわかる。

3-2 這邊、那邊、傍邊、四邊

内面、外面、向裏面、四面

外頭、裏頭、上頭、下頭（《同文》地理門）（《蒙語》地理門）

これらは《同文》《蒙語》の地理門に収録される語であるが、これらの基本的な語が実は《訳語》には収録されていないのである。“～裏”は“～裡”と作って名詞に後置される例は認められるが上記のような語は収録されていない。また《訳語補》にも補充されていない。その代わり《訳語》瑣説門244-9、10に“這簷子”“那簷子”がある。朝鮮語訳は“這簷子”が「이편[ここ]」「那簷子」が「여편[そこ]」となっている。この2語については不明である。

《訳語》に以上のような基本的な語彙が未収録なのは、漢学訳官にとって周知のものであったためであろうか、確かに《同文》《蒙語》には《訳語》には無い“這箇”“那箇”や人称代名詞等、特に代名詞に関しては多数収録されている。やはり清学、蒙学の訳官が知らなければならない漢語のレベルと漢学訳官が必要とした漢語のレベルの差が収録語彙の差に反映されているのであろうか。《訳語》には基礎的語彙ほど方言性を帯びたものや“這簷子”“那簷子”的ように「素性のわからない」語が多く収録されている傾向がある。なお、《訳語》には「○元話」（元代の語）と注記されている語も収録されている。以下にその例を取り上げる。

“鐵타落로”○드례○元話（《訳語》169-3）

“洒시子즈”○上全（《訳語》169-4）

“鐵落”と“洒子”は同義語である。《訳語》には同じく“드례”と解釈されている“水斗”（《訳語》169-2）が収録されている。“드례”は《17世紀国語辞典》では“두례박”「つるべ、繩のついた井戸で使う桶」となっている。“洒子”については崔世珍の《老乞大集覽》（上2-a）に

洒子汲水之器 以柳枝編成者呼曰柳罐 元語謂帖落 洒音サ上聲（“洒子”は水を汲む器である。柳の枝を編んでできているものを“柳罐”と呼ぶ。元代のことばでは“帖落”。“洒”的音は“サ [sa]”の上声である。）

とあり、また元刊本《老乞大》にも9張め後と10張め後に“帖落”が認められる。元刊本《老乞大》を明代に改訂した《翻訳老乞大》ではこの“帖落”は共に“洒子”と書き換えていることからして、“帖落”或いは“鐵落”は《老乞大》改訂の際にすでに「時用」に適さないと判断されていたことがわかるが、1690年刊行の《訳語》では“鐵落”が見出し語として立てられ、《老乞大》改訂の際に“帖落”から替わった“洒子”が“鐵落”の次に同義語として立てられている。「漢語方言大詞典」にも“鐵落”“帖落”で「つるべ桶」「桶」等を意味する語は収録されていないから、“鐵落”は明らかに元代の古語であるのに、また同じ“드례”を意味する“水斗”が見出し語としてあるのに、なぜこれを「元話」と注釈してまで《訳語》が収録したのか疑問である。或いは《訳語》が編纂の際に参照した《訳語指南》（失伝）に収録されていた“鐵落”をそのまま残してしまったのが原因とも考えられる。ともあれ、《訳語》にはこのように意図的か否かはわからないが、古い言葉を収録している例も認められる。《同文》《蒙語》では“鐵落”“洒子”とともに未収録で、“水斗”（《同文》158-9《蒙語》124-6）のみが収録されている。

3-3 一齊（《同文》雜語門226-5）（《蒙語》雜語門185-3）

“一齊”の朝鮮語訳は「一齊 [いっしょに]」である。この語も《訳語》《訳語補》には未収録であるが、同じ朝鮮語訳に解釈されている語に《訳語》では“打夥兒”（《訳語》瑣説門

243-7) がある。“打夥兒”の「夥」は「伙」に通じ、“大伙儿”で「皆で」の意味になる。この“打夥兒”は《同文》《蒙語》に“打夥兒坐”(《同文》動靜門 52-10)(《蒙語》動靜門 40-10)“打夥兒喫”(《同文》食餉門 125-9)(《蒙語》食餉門 98-6)“打夥兒哈”(《同文》食餉門 126-9)(《蒙語》にはなし)のように副詞的用例が認められる。《同文》《蒙語》にこのように動詞の修飾成分として“打夥兒”をつけた形が見出し語として収録されているのに、《訳語》ではなぜ“打夥兒+V”的ような形の見出し語が立たなかつたのであろうか。これは満州語に關係があると思われる。《同文》の“打夥兒+V”的満州語部分を見ると、“打夥兒坐”には“tecembi”、“打夥兒喫”には“jenumbi”、“打夥兒哈”には“omicambi”という訳がついている。この満州語は“tembi”「座る」「jembī」「食べる」「omimbi」「飲む」の動詞基本形に動詞の派生接尾辞⁶⁾-ca-、-ce-、-nu-がついたもので、-ca-、-ce-は「共同で、共に、共々に」-nu-は「相互にしあう」という意味の派生語を構成する。このように満州語では漢語や朝鮮語で副詞+動詞の構造で表現するものも動詞そのものの派生形で表現するために、満州語の1語に合わせて漢語見出し語を設定したためであろう。《清文鑑》には“打夥兒”は収録されていないが、“一齊+V”的構造の見出し語が多数収録されていることも、このことを裏付ける”。

このように、収録された満州語の影響で漢語見出し語に《同文》と《訳語》の差が表われる例は他にも多数あるが、以下では特に《同文》《蒙語》に多数認められる1音節の動詞や形容詞に“～了”“～着”“～啊”等が後置されて見出し語となっている例を取り上げる。

4 《同文》《蒙語》中の“～了”“～着”“～啊”について

《同文》《蒙語》の漢語見出し語で特徴的なのは、主に1音節の動詞、形容詞などに現代語風に言えば助詞の“～了”“～着”“～啊”を後置して見出し語として立てている例が数多く認められることである。“～了”が後置するものは《訳語》の34例に対して《同文》142例、“～着”が後置している例は《訳語》が16例に対して29例、“～啊”は《訳語》に該当例が無いのに対して、《同文》では33例が認められる。

4-1 “～了”

《訳語》で“了”が後置する見出し語は1音節の見出し語だけとは限らず、1音節語のあとに“了”がつく34例の他にも二音節や三音節の語やフレーズに“了”を後置する例が認められる。しかし《同文》《蒙語》では殆どが1音節語に“了”が後置されて見出し語となっている例である。そのうち、1音節形容詞に“了”を後置している例が8例、1音節動詞(少数の二音節動詞も含む)に“了”が後置されるものが134例あり、《同文》で1音節の動詞に“～了”を後置して見出し語として立てられている34例と比べて圧倒的な数に上っている(《訳語》には形容詞に“了”が後置されている例は無い)。

4-1-1 形容詞+了

“～了”が後置されている見出し語中、明らかに形容詞に“～了”が後置されている8例はすべて朝鮮語訳も満州語訳もそのまま形容詞として訳されている。漢語では形容詞に“了”がつく場合、「その状態になる」こと、つまり状態の変化を表わすが、《同文》の場合、そのよう

な意味解釈は朝鮮語、満州語いずれの部分でもなされていない。

“厚了” 두덥다○jiramin（《同文》237-5）（《蒙語》194-8）

“短了” 쟁릉다○foholon（《同文》237-4）（《蒙語》194-8）

“두덥다” “jiramin” は共に「厚い、厚さ」、「쟁릉다」 “foholon” は共に「短い、短さ」である。ただ1例、“大”については：

① “大” 크게又만히○ambula（《同文》237-6）（《蒙語》139-2）

② “大了” 크다○amba （《同文》237-6）（《蒙語》139-2）

とあり、①は朝鮮語では「大きく又は多く」、満州語は「大きく、大いに」と副詞として解釈されている。②は朝鮮語、満州語共に形容詞である。漢語に“～了” “～着”を附加して見出し語とするのは清代に刊行された満漢合璧様の辞書に多く認められることから、朝鮮朝訳学のオリジナルではないことは明らかで、《同文》編纂時に参照した《大清全書》《清文鑑》《同文廣彙》などの体裁に習ったものであると考えられる。漢語の常識的な認識からすれば、“大”だけで形容詞として捉えるのが一般的であるが、①のように“大”を敢えて副詞としていることからして、《同文》の朝鮮語訳は漢語見出し語よりも満州語部分を参照して付されたものと考えられる。

4-1-2 動詞+了

動詞+了の形で現れる見出し語の大多数がやはり動詞である。漢語では“了”は動詞に後置され動作の完了を表わすが、《同文》においては例えば：

③ “笑” 우음○injeku （《同文》51-7）（《蒙語》に無し）

④ “笑了” 웃다○injembi （《同文》51-8）（《蒙語》39-3）

朝鮮語、満州語共に訳は完了形ではなく、満州語の場合では逆に語尾-mbiがあることから、未完了終止形である。朝鮮語の「～だ」満州語の「-mbi」は共に動詞の基本的な終止形語尾で辞書に収録される形である。このように《同文》に見られる“動詞+了”はその殆どが完了形に解釈されていない。上記の①②例や③④例からわかるることは、“～了”が接尾辞によって異なる品詞の語を派生させる満州語に基づいて、品詞の違いを区別するために完了などの本来の機能とは関係なく附加されていることである。《同文》では“動詞+了”的142例中117例で満州語部分に未完了終止形の“-mbi”動詞が充てられている。

4-1-3 動詞+了で満州語部分が“-mbi”以外の活用形を取っているもの

この例は17例認められる。以下に具体例を示すと：

⑤ “鐵锈” 보诽○sebden○又동녹 （《同文》176-3）（《蒙語》140-10）

⑥ “锈了” 보诽쓰다○sebdekebi （《同文》176-3）（《蒙語》141-1）

⑤の朝鮮語訳は「錆」満州語も「錆」である。⑤の2つめの圈点の後の「又동녹」は朝鮮語で、「銅綠」という漢字が当る漢字語で「17世紀国語辞典」では「銅の錆、緑青または一般に金属の錆」とある。⑥はその動詞形が示されていて、朝鮮語は「錆がつく」である。満州語は「錆びた」となっている。“sebdekebi”的“-kebi”は動作の完了終止形で、「過去の動作の終わった状態が現在も継続していることを述べる」（「満州語文法入門」河内良弘等 2002）ことを表わす活用形である。この活用形は母音調和などによって、“-habi、-hebi、-hobi/-kabi、-kebi、-kobi”的形式がある。《同文》では17例中4例がこの活用語尾を持つ満州語で解釈されている。

- ⑦ “排了” 베리다○faidaha (《同文》249-8) (《蒙語》に無し)
 ⑧ “沒了” 尊稱죽다○akuoho 一云 usaraha (《同文》148-5) (《蒙語》117-6)
 ⑨ “死了” 通稱주다○bucehe (《同文》148-5) (《蒙語》117-6)
 ⑩ “消了” 놋다○wengke (《同文》125-8) (《蒙語》に無し)
 ⑪ “熟了” 通稱닉다○urehe (《同文》121-7) (《蒙語》94-10)
 ⑫ “散了” 흐터지다○samsifa (《同文》93-9) (《蒙語》71-7)

また以上⑦～⑫のように満州語部分で “-ha、 -ho、 -he、 -ko” の活用語尾をとっているものが認められる。これは動詞の完了連体形語尾の “-ha、 -he、 -ho/-ka、 -ke、 -ko” で、「いわゆる連体止めの形で、その動詞の完了アスペクトを表わす終止形となり、ある動作がすでに行われた、という意味を表わし、」(上掲河内 2002) これらの用例は漢語の “了” の用法通り完了の標識として機能している。

- ⑬ “餓” 주립○omihūn (《同文》185-7) (《蒙語》148-9)
 ⑭ “餓着” 주리다○omiholombi (《同文》185-7) (《蒙語》148-10)
 ⑮ “餓了” 빈읍프다○yadahūšambi (《同文》185-8) (《蒙語》148-10 “肚裏餓了”)⁸⁾

以上の朝鮮語は⑬「飢え」⑭「飢える」⑮「腹がへる」となっている。満州語部分は⑬「飢餓、飢え」⑭⑮は共に「飢える」で動詞である。⑭⑮の動詞は前述の通りどちらも未完了終止形語尾 “-mbi” をとっているので、“～着” “～了” によってアスペクトの違いを示しているのではない。“omiholombi” は “omihon” 「飢餓、飢え」から派生する動詞で、“yadahūšambi” は “yadahun” 「貧しい」から派生した動詞である。2つの含意の違いは⑭⑮の朝鮮語訳によく表われているが、“餓着” “餓了” を別々に見出し語として立てたのは、単に満州語の異型同義の語に合わせて漢語見出し語を区別したためであろう。

- ⑯ “中啊” 맛다○goimbi (《同文》97-8) (《蒙語》74-2)
 ⑰ “中了” 맛치다○goibumbi (《同文》97-8) (《蒙語》に無し)

これは動詞 “中” (zhòng) 「命中する」に当る語の部分であるが、⑯では “～啊” がついて朝鮮語、満州語共に「当る」と解釈している。これに対して⑰では朝鮮語では「当てる、命中させる」満州語でも動詞基本形の “goimbi” に使役、受け身を示す派生接尾辞の “-bu-” をつけ「当てる、命中させる」としている。⑯⑰の “～了” は漢語の “～了” が本来持つ文法的意味とは異なっている。⑯⑰も或いは満州語の基本終止形 “goimbi” と派生形である使役動詞の “goibumbi” を見出し語の上でも区別するために便宜的に附加されたものに過ぎないようである。

以上から《同文》の主に单音節動詞に “～了” が後置された見出し語は (1) 大多数が漢語見出し語もしくは以下に続く満州語が単に動詞であることを区別するために付されたものと (2) 漢語の “～了” の本来の文法的意味と同様に、完了のアスペクトを表示しているものに分かれる。また (3) 滿州語部分の動詞の派生形の違いを明確にするために漢語見出し語において “～了” を附加したもの (例⑰) と満州語の異型同義の動詞を区別するために附加されたものも用例は少ないが認められた。

形容詞 + “了” は本来の漢語の文法的意味である状態の変化を表わしているのではなく、名詞や動詞ではないことを示す表示として附加されたものと考えられる。満州語では形容詞は活用せず、さらには多くの形容詞が名詞として機能する。“～了” はこのような満州語の特徴を考慮し、その語が形容詞であることを明確にするための手段であったと思われる。また朝鮮語においても、動詞と形容詞は同じ活用をする。この点で、朝鮮語の立場からも形容詞であるこ

とを明確にする“了”が必要であったとも考えられる。单音節動詞の後に“了”が置かれ見出し語となっているのものが《訳語》にも34例認められることからも、類解辞書の漢語見出し語における“～了”的使用は、単に満州語の特徴だけに起因するものではないようである。

《訳語》からの例をあげる。

⑯ “大了翌” ○살넘다 (《訳語》 42-6)

⑰ “小了翌” ○살띠디다 (《訳語》 42-6)

この2つは《訳語》教閥門にあり、朝鮮語訳は“살넘다”「矢が超える」「살띠디다」「矢が遅れる」で動詞である。形容詞の“大”“小”ではないことを明確に示すため“了”が附加されている。

4-2 “～啊”

《同文》《蒙語》では单音節語に“～啊”がつく見出し語が33例でそのうち、单音節動詞に“啊”が附加する例が13例、单音節形容詞に附加する例が20例認められる。

4-2-1 形容詞+啊

㉐ “善啊” 촉흐다○sain (《同文》 46-3) (《蒙語》 に無し)

㉑ “惡啊” 사오납다○ehe (《同文》 46-4) (《蒙語》 に無し)

㉒ “低啊” 턱다○fangkala (《同文》 16-2) (《蒙語》 13-10)

㉓ “高啊” 높다○den (《同文》 16-2) (《蒙語》 13-9)

㉔ “衆啊” 여러○geren (《同文》 173-7) (《蒙語》 138-8)

以上のように形容詞に後置された“啊”は殆ど全て満州語部分でも“sain”「よい」「ehe」「悪い」「fangkala」「低い」「den」「高い」「geren」「多い」と形容詞となっている。ただ1例のみ

㉕ “忙啊” 빗브다○ekšembi (《同文》 233-4) (《蒙語》 190-7)

のように、満州語部分が“ekšembi”「急ぐ」と動詞となっている。朝鮮語は「忙しい」。

前述の通り、満州語では名詞と形容詞の区別が無いために、名詞ではないことを示すために“啊”が附加されていると考えられる。《同文》《蒙語》には单音節形容詞に何も後置されず、そのまま見出し語となっている例が26例ある。

4-2-2 動詞+啊

㉖ “麻啊” 저리다○fumbi (《同文》 143-2) (《蒙語》 114-2)

㉗ “過啊” 과흐다○dabanambi (《同文》 244-6) (《蒙語》 に無し)

以上は“～啊”が㉖“fumbi”「渾れる」㉗“dabanambi”「超えてゆく」と動詞の未完了終止形で訳されている。この他にも動詞として訳されている例があるが、

㉘ “有麼” 잇느냐○biu (《同文》 232-10) (《蒙語》 39-3)

㉙ “有啊” 잇다○bimbi (《同文》 232-10) (《蒙語》 39-4)

㉚ “中啊” 맛다○goimbi (《同文》 97-8) (《蒙語》 74-2)

㉛ “中了” 맛치다○goibumbi (《同文》 97-8) (《蒙語》 に無し)

㉜ “富” (朝鮮語訳なし) ○bayan (《同文》 185-1) (《蒙語》 148-4)

㉝ “富啊” 가옴여다○bayambi (《同文》 185-1) (《蒙語》 148-5)

以上のように、前後に異なる品詞や異なる派生語の語項が並んでいる。㉘「有るか？」㉙「有る」では疑問形と基本形の区別として、㉚「当る」㉛「当てる」では基本形動詞と使役形の区別として、㉜「富」㉝「富む」では名詞とそれから派生した動詞形を区別するマーカーと

して添加されている。特に⑩～⑬の例では“啊”自体には本来使役を表わす文法機能や動詞に後置して何らかの文法機能を表わすという働きはないので、形式的に満州語の派生形を見出し語で区別するためだけに添加されていることがわかる。

以上その他、单音節動詞に“啊”が添加されている例で5例が満州語の完了連体形語尾の“-ha、-he”1例が完了終止形または完了断定形語尾の“-habi”をとった満州語（この例の漢語見出し語は2音節語）に訳されている。

- | | |
|---------------------|------------------------|
| ⑭ “亡啊” 망흐다○gukuhe | （《同文》94-4）（《蒙語》72-3） |
| ⑮ “卒啊” 죽흐다○dubehe | （《同文》148-4）（《蒙語》117-5） |
| ⑯ “崩啊” 崩흐다○ulihe | （《同文》148-3）（《蒙語》に無し） |
| ⑰ “薨啊” 薄흐다○burubuha | （《同文》148-4）（《蒙語》に無し） |
| ⑱ “晚啊” 늦다○goidaha | （《同文》10-10）（《蒙語》9-6） |

以上の例の朝鮮語訳部分はすべて動詞の基本終止形であるが、満州語は動詞の完了連体形語尾で訳されている。完了連体形語尾は連体止めで動詞の完了終止形にもなり、また体言に前置され連体修飾語ともなる。完了連体形の体言止用法で日本語では「～した～」の訳が当る。連体止めの用法で解釈すれば、“～啊”が満州語の完了アスペクトに対応するマーカーとして使用されていることになるが、朝鮮語部分では完了形をとってはいない。恐らくは満州語が“-ha、-he”的語尾をとっているために、あとに被修飾語が続くことを意識して、これらが動作そのものを意味するのではなく、その動作によって残された状態を意味しているものであることを明確に示すために“～啊”が添加されたものと考えられる。

- ⑲ “冤屈啊” 위련흐다○muriuhabi （《同文》188-1）（《蒙語》151-5）

この例の満州語は“muriuhabi”「無実の罪を被った」の意味で“muribumbi”「無実の罪を被る」が完了終止形または完了断定形語尾をとったものである。この“-habi”は完了終止形或いは完了断定形のいずれでも、過去に行われた動作の結果や状態が現在も継続して残っているという意味を表わす。このことから、状態を表わす語であるという判断の下に“～啊”が附加されたものである。

以上のように《同文》《蒙語》で附加された“～啊”は形容詞であることを明確にするためのマーカーとしての働きと、動詞に後置された場合でもそれがその動作そのものを意味するのではなく、動作以降の残された状態を示すマーカーである。

4-3 “～着”

单音節形容詞に“～着”がついて見出し語となっている例は

- | | |
|-----------------------|------------------------------|
| ⑳ “快着” 수이○hasa | （《同文》233-4）（《蒙語》190-7 “快些兒”） |
| ㉑ “快着” 셀니흐다○hudulambi | （《同文》233-2）（《蒙語》190-5） |

以上の2例のみで、しかも㉑は朝鮮語、満州語共に「すぐに」「大急ぎで」とあるから、副詞としての用例である。㉑は朝鮮語、満州語共に「早くする」「急ぐ」で動詞であるから、実際は形容詞の後に“～着”がつく例は無いと言ってよい。

《訳語》では“者”と作り、“자 [jo]”と注音したものを单音節語に後置している例が18例ある。この18例は全てが单音節動詞に“～着”が後置されている例である。

4-3-1 命令形を示す例

④❷ “坐着” 안즈라○te (《同文》52-8) (《蒙語》40-9)

④❸ “坐” 안ㅅ다○tembi 又マラ안ㅅ다 (《同文》52-8) (《蒙語》40-9)

❷は朝鮮語、満州語共に「座れ」で命令形に訳されている。❸は朝鮮語、満州語共に「座る」である。満州語以下に「又マラ안ㅅ다」とあるのは朝鮮語の注記で、現代語では“가라앉다”「沈む、沈殿する」或いは「落ち着く」などの意味である。命令形を示す“～着”は以上の1例のみである。現代漢語でも“着”は動詞の後で命令の語気を付け加える用法がある。しかしこの“着”は《同文》《蒙語》に1例のみで、《訳語》でも

“坐조着쳐” ○안싸 (《訳語》81-4)

のように“안싸”「座る」と基本終止形で訳されているから、類解三書中に命令形として現れる“着”はこの例のみとなる。《同文》での“坐”“坐着”的収録の状況を見ると、

❹ “坐着” 안즈라○te (《同文》52-8) (《蒙語》40-9)

❺ “坐” 안ㅅ다○tembi 又マラ안ㅅ다 (《同文》52-8) (《蒙語》40-9)

❻ “請坐” 안즈쇼셔○teki (《同文》52-9) (《蒙語》に無し)

❼ “教坐” 안치다○tebumbi○又Neillta (《同文》52-9) (《蒙語》40-10)

❽ “打夥兒坐” 여라하안ㅅ다○tecembali (《同文》52-10) (《蒙語》40-10)

以上のように満州語の「座る」という動詞の派生形に対して漢語見出し語が立てられていることがわかる。満州語では動詞語幹だけで命令形を表わすから、“坐”的見出し語に“te”「座れ」を対応させたほうが合理的であるが、《同文》の編纂者はそうはしなかった。やはり漢語の命令形に使用される“着”が念頭にあったためであろうか。❹～❽の満州語は“te”「座れ”“tembi”「座る」(未完了終止形(=基本活用形))“teki”は動詞語幹“te-”に動詞の願望終止形語尾“-ki”がついた形である。願望終止形とは上掲「満州語文語入門」(2002)によれば「話者の願望、計画、相手に対する願望を表わす」とし、動詞語幹に接辞し「～してください」の意味を表わすものである。“tebumbi”は派生語尾“-bu-”が語幹の後に挿入された形で、使役、受け身を意味するから「座らせる」となる。“tecembali”はやはり語幹の後に派生語尾の“-ce-”が挿入され、「相共に」「共々に」という意味を持つ。よって「一緒に座る」となる。満州語ではこのような動詞のバリエーションをすべて動詞の派生形として1語で表して行くのであるが、このそれぞれの派生動詞に対応して漢語見出し語が立てられており、この場合の“～着”も他の派生動詞との区別を明確にするためのマーカーとして附加されたものであると考えられる。前述のように、《訳語》では“坐”が見出し語に無く、“坐着”だけが“안싸”と動詞の基本形に対応する見出し語として立てられていることからも、また《同文》において“着”を満州語の命令形動詞に対応させているのが上記の1例のみであると言う点もこのことを裏付けている。

4-3-2 満州語部分に動詞化接尾辞が現れている例

これまでに検討した3例以外の26例中、5例については満州語部分がすべて名詞、形容詞、その他の品詞に後置し、その語を動詞化させる働きを持つ「動詞化接尾辞」がつくことによって派生した動詞である。

❾ “挿着” 씨다○hafirambi (《同文》61-6) (《蒙語》47-9)

❿ “逢着” 안니다○ucarambi (《同文》60-3) (《蒙語》46-8)

以上は満州語部分が “-ra-、 -re-” の動詞化語尾をともなっている。意味は “hafirambi” が「挟む」で“hafihun”「寸のつまつた」等の語が動詞化したものである。“ucarambi”は「会う」で、“ucaran”「出会い」が動詞化した形である。

- ⑤1 “急速着” 급히 향다 ○hahilambi (《同文》233-3) (《蒙語》190-6 “急些着”)
- ⑤2 “餓着” 주리다 ○omiholombi (《同文》185-7) (《蒙語》148-10)
- ⑤3 “快着” 셀니 향다 ○hudulambi (《同文》233-2) (《蒙語》190-5)

以上の例は満州語部分に動詞化語尾の “-la-、 -lo-” をともなった形である。“hahilambi”は「急ぐ」で形容詞 “hahi”「緊急な」の動詞形、“omiholombi”は「飢える」で名詞 “omihün”「飢え」の動詞形、“hudulambi”は副詞 “hüdun”「早く」の動詞形である。⑤1～⑤3 の例は《同文》でその前後に

- ⑤4 “急速着” 급히 향다 ○hahilambi (《同文》233-3) (《蒙語》190-6)
- ⑤5 “緊急” 급히 ○hahi (《同文》233-3) (《蒙語》19-6 “打急”)
- ⑤6 “餓” 주립 ○omihün (《同文》185-7) (《蒙語》148-9)
- ⑤7 “餓着” 주리다 ○omiholombi (《同文》185-7) (《蒙語》148-10)
- ⑤8 “餓了” 빙꼽프다 ○yadahüsambi (《同文》185-8) (《蒙語》148-10 “肚裏餓了”)
- ⑤9 “快着” 수이 ○hasa (《同文》233-4) (《蒙語》190-7 “快些兒”)
- ⑤10 “快着” 셀니 향다 ○hudulambi (《同文》233-2) (《蒙語》190-5)

のように他の品詞による語項が立っているので、やはり満州語が動詞であることを明確にするためのマーカーとして使用されているようである。

以上の他の22例については共通点は動詞であること意外には見出せない。これらも形式的に漢語見出し語以下に続く満州語が動詞であることを明確にするために付されているものようである。

以上のような单音節語に後置された “～了” “～啊” “～着” は当然朝鮮朝訳学のオリジナルではなく、清代に刊行された満漢合璧様の漢－満辞典の影響を受けたものである。しかし、《同文》《蒙語》に見られる “～了” “～啊” “～着” が後置する漢語見出し語は、その語が《清文鑑》等でも必ず “～了” “～啊” “～着” が後置されているわけではない（《清文鑑》では《同文》《蒙語》に見られるような “～啊” の例は認められない）。今後《漢清文鑑》等の資料との詳細な比較が必要となる。今回本稿では《同文》に収録された満州語語彙に “～了” “～啊” “～着” 使い分けの意図が見えるのではないかと考え、分析を試みた。結果、“～了” “～着” については動詞であることを明示するための機能が、“～啊” には形容詞もしくは動作の結果残された状態の持続を表わす機能があることが大方明らかになった。しかし、今回取り上げなかった22例の “～着” の例、また《訳語》《同文》《蒙語》には “～他” が後置されて見出し語になっている例もあり、これも含めて引き続き更に詳細に分析しなければならない。

4 まとめ

本稿では前稿に引き続き、朝鮮朝訳学で外国語辞典として編纂刊行された類解三書即ち《訳語》《同文》《蒙語》の見出し語として立てられている漢語について考察を進めてきたが、

《訳語》では同義語として記載された語に方言性の強い語や方言音を注記する例が多く認められる他にも、見出し語それ自体にもかなり方言的と思われる語彙や、例えば“鐵落”のような元代のことばとされる語までが収録され、逆に外国語学習の上で基本的とされる語彙があまり収録されておらず、《同文》《蒙語》には逆に基礎的な語彙が収められていると言う語彙収録の傾向が明らかになった。また、《訳語》に収録されている語の中でも北方方言のそれもかなり方言性の強い語が《同文》や《蒙語》には見出し語として立てられ、それらの語は《清文鑑》などの中国の資料にも認められない。前稿でも指摘したように、朝鮮朝の漢語を対象とした漢学、満州語を対象とした清学、蒙古語を対象とした蒙学、特に漢学と清学との間で、それぞれに必要とした漢語に質の違いがあったのではないかということが考えられる。

《同文》が朝鮮朝で刊行された18世紀、中国ではすでに満州族の漢化がかなり進んでいた時期であり、漢城から北京までの朝貢ルート上の遼寧、河北一帯や国境を接する吉林一帯の漢語方言は漢学訳官ばかりか、清学訳官にとってみてもむしろ満州語以上に重要であったことは間違いない。このような中国での言語事情は朝鮮朝の漢学、清学或いは蒙学のテキストに現れる漢語にも反映されたはずである。

今回は《同文》《蒙語》中の“～了”“～着”“～啊”が後置された見出し語が中心となり、《訳語》《同文》《蒙語》に《訳語補》《蒙語補》も含めた漢語語彙の全体的な比較ができなかった。これについては一連の類解辞書の対照語彙目録の作成も含めて今後の課題としたい。

注

- 1) 前稿同様、本稿でも《訳語類解》を《訳語》、《同文類解》を《同文》、《蒙語類解》を《蒙語》と略記する。また《訳語類解補》を《訳語補》《蒙語類解補》を《蒙語補》と略記する。
- 2) 大阪外国语大学図書館のweb検索ではこの書名は見つからなかった。
- 3) 《訳語類解補》は《訳語類解》の足りない語彙を補充したもので、漢語音のハングル転写法は《訳語類解》と変わらない。《訳語類解》のように見出し語の朝鮮語訳部分に「上仝」と記し1つ上に記載された語と同義関係であることを示したり、朝鮮語訳以下に「一云～」「或云～」等として同義語を注記することは無い。またやはり注記によって漢字音の異読や方言音を示すことも無い。同義語は朝鮮語訳以下に圈点を配し、漢字の下1字毎にハングルによる注音を施す形で示している。《訳語類解補》にはこのような形で示された同義語が約178語ある。1775年金弘禱編。本稿では1974年亞細亞文化社から影印出版された「訳語類解」所収の奎章閣古図書本を使用した。

《蒙語類解補》の編纂刊行の経緯については本文に譲る。体裁はやはり《蒙語類解》と同様である。本稿では1971年にソウル大学校出版部より「ソウル大学校古典叢書」として影印出版された「蒙語類解」所収の奎章閣本を使用した。《同文類解》は1955年に韓国延禧大学校東方学研究所から國故叢刊第9として影印出版された「八歲兒 三訳総解 小兒論 同文類解」を使用した。

なお、《訳語》《同文》《蒙語》及び《訳語補》《蒙語補》からの例を示す場合、()内に上記影印本のページ数と行数を示す。

- 4) 《同文》では満州語はハングルで表記されているが、本稿ではそのハングル表記をメルレンドルフのローマ字表記によって転写する。なお、満州語の日本語訳は「満和辞典」羽田亨編国書刊行会の復刻版によった。また《訳語》《同文》《蒙語》及び《訳語補》《蒙語補》中の中期朝鮮語のハングル表記は原文どおりに表記する。
- 5) 拙稿「《你呢貴姓》の言語に関する初步的分析」語学教育論叢第12号 大東文化大学語学教育研究所 1995年
- 6) 満州語の文法用語は「満州語文語入門」河内良弘等編著 京都大学学術出版会2002によった。

- 7) ここでいう『清文鑑』とは『御製增訂清文鑑』のこと、「清代中国語満州語辞典」中嶋幹起等編アジア・アフリカ言語文化研究所 1999 を参照した。
- 8) 『同文』と『蒙語』の漢語見出し語が異なっていて、朝鮮語訳が同じ場合は『蒙語』のページ数、行数の後に“ ”内に『蒙語』の漢語見出し語を記す。

参考文献

- 『小兒論・同文類解・八歳児・三訳総解』延禧大学校東方学研究所 1956
『訳語類解』亜細亞文化社 1974
『蒙語類解』ソウル大学校出版部 1971
『漢語方言大辞典』復旦大学・京都外国語大学編 中華書局 1999
『普通話基礎方言基本語彙』陳章太・李行健編 語文出版社 1996
『17世紀国語辞典』韓国精神文化研究院編 太学社 1995
『中国語大辞典』角川書店
『満和辞典』羽田亨編 国書刊行会 1987 復刻版
『清代中国語満州語辞典』中嶋幹起編 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 1999
『大清全書一附満文索引一索引編』早田輝洋・寺村政男 言語フォーラム第7号大東文化大学語学教育研究所 2002
『満州語文語入門』河内良弘・清瀬義三郎則府編著 京都大学学術出版会 2002
『朝鮮訳学考』林東錫 国立台湾大学国文研究所博士論文 1983
「類解類訳学書について」鄭光 「国語学」7 国語学会 太学社 1978
「捷解蒙語解題」金炯秀 『捷解蒙語』弘文閣 1988 所収